

ラフカディオ・ハーンとケルト神話 ―異界との交流―

結城史郎（富山大学）

はじめに

ラフカディオ・ハーンの母語は英語である。フランス語や日本語にも通じていたとは言え、執筆はあくまで英語であった。この事情を念頭に入れるならば、幼少期から青年期までを過ごしたアイルランドの影響は無視しがたい。アイルランドがハーンに及ぼした影響についてはあまり論じられたことはないが、英語が母語であることから、アイルランドの文化とのつながりを否定することはできないだろう。事実、アイルランドの詩人 W. B. イェイツに宛てて、ハーンは、「わたしはコナハト出身の保母から、アイルランドの民話や幽霊話を聞かされました」¹と告白している。

たとえば、『東の国から』(*Out of the East*, 1893) に収められた「夏の日」で語られている浦島伝説の背景には、ケルト神話のアシーン伝説の影響が色濃い。浦島伝説とアシーン伝説を結ぶ決定的な論拠はもちろんないが、「夏の日」でハーンが浦島伝説を語りながら、「西洋のばあいだと、だいぶこれとは違った扱をうける」²と不満をもらしている。ハーンの疑義は浦島が何のトラブルもなく往生したところにあった。それと対照的に、アシーン伝説の英雄アシーンは、老いながら孤独な余生を送っている。ハーンは浦島伝説に共鳴しながらも、アシーン伝説を想起し、浦島の最期に違和感を覚えたと思われる。本稿ではハーンの世界に伏在する、そうした彼の西洋的な視点を検討することにする。そのため初めにハーンの世界とケルト神話のアシーン伝説を比較しておきたい。次に、浦島伝説へのハーンの世界の背景となる異界との交流の意味をめぐり、西洋と日本の文化の相違について考察する。そしてハーンが憑かれていた宿命の女へと論を広げ、10年後に書かれた『怪談』(*Kwaidan*, 1904) に収められている「雪女」を取り上げ、異界との交流についてのその後のハーンの世界を論じることにはしたい。10年という歳月の間にハーンの世界への眼ざしにも大きな変化が見られたであろう。

浦島伝説とアシーン伝説

ハーンの世界の浦島伝説は、夏の日のもどろみに浸りながらの創作で、旅行記の一部として、感想を交えながら自らの心情が細やかに綴られている。物語はこのような感じである。

——はるか1416年の昔のこと、漁師である浦島太郎が釣り船で糸をたれていると、一匹の亀がかかった。亀は千年あるいは万年という寿命をもつ生き物で、浦島はその亀を放してやることにする。折しも晴天の夏の日のこと、浦島は眠気に襲われ、いつしかまどろんでしまう。すると目の前に美しい乙姫が現れ、亀を助けてくれた浦島に感謝し、彼女の父である「竜神」の住む、永遠に若さを保つ常夏の島、「竜宮」に彼を連れて行く。そして二

人は結婚し、3年にわたる至福の日々を過ごす。

だがそんな幸せのさなか、浦島が両親への思慕を募らせる。乙姫は悲しみながらも、浦島の気持ちを察し、帰郷を認めてくれる。そのとき彼女は浦島に玉手箱を渡し、再び戻ってくるためには開けてはならないという約束をさせる。こうして浦島は故郷に帰るものの、実は400年の歳月が経過していたことが判明する。両親もすでに鬼籍の人となっていた。浦島は寂しさにたえかね、つい玉手箱を開けてしまう。すると箱から白い煙が舞い上がり、竜宮に向かって流れ、浦島は老いてそのまま倒れてしまう。

この浦島伝説と驚くほど似ているのが、ケルト神話で伝えられているアシーン伝説である。アイルランド神話をめぐる一般的な記述ではこう説明されている³。

——はるか昔、アシーンが父フィン・マックールや戦士たちと狩りをしていると、そこに美しい乙女ニーヴが馬に乗って現れ、アシーンに愛を告げる。アシーンはあまりにも美しいニーヴに惹かれ、父や同士を振り切って、彼女の父である海神マナナーン・マック・リアの住む「常若の国」へと向かう。そして二人は結婚し、3年ほど幸せな日々を過ごす。

だがある日のこと、アシーンは望郷の念にかられ、しばし郷里へ帰りたいたとニーヴに申し出る。彼女はアシーンの願いを受け入れ、帰郷のために馬を用意してくれる。ただし馬から降りて大地に足をつけてはならないとの条件をつけてであった。こうしてアシーンは故郷に戻るが、あたりの様子がすっかり変わっていることに気づく。その折に、村人が石を除こうとしている光景が目に入る。アシーンは手を貸して石を持ち上げてやるが、彼は落馬してしまい、地に足が触れてしまう。こうしてアシーンはたちまち老人となり、早くも300年が経過していたことを知る。

二つの伝説の類似と相違

このように二つの伝説を並べてみると、両者の間にかなりの類似が認められる。まずは以下の3点でまとめられよう。

(1)	この世に暮らす男の前に、美しい乙女が現れ、男は一目惚れしてしまう。そして二人は乙女の住む、この世とは違う異界へと旅立つ。
(2)	その異界は常若の国で、二人は結婚し、至福の日々を過ごす。が、男は望郷の念にかられ、乙女にしばしの帰郷を願う。願いは聞き入れられるが、再び異界に戻るよう、犯してはならない「タブー」が課される。
(3)	故郷に戻ってみると、かつての情景が変わっていて、知らないうちにかかなりの歳月が経過したことがわかる。わずか3年が300年から400年にも相当していた。異界には「時間の流れ」がなかったのである。男には知る人もなく、未知の世界に入り込んだ気がし、失望する。

同時に相違も際立っている。異界への旅立ちの乗り物が船か馬かといった問題はさておいて、大きな違いとして以下の3点が挙げられる。

(1)	浦島が亀を助けた恩への報いとして、乙姫と結ばれるのに対し、アシーンは遅しく知恵のある人物であるため、むしろニィーヴの方が惹かれている。異界への旅立ちとは同じではない。
(2)	浦島は自分の手でタブーを破るのに対し、アシーンはやもえぬ事情によりその禁を犯している。浦島は自分の都合であるが、アシーンは人助けのためによる。これも大きな違いである。
(3)	タブーを犯した折、即死する浦島とは対照的に、アシーンはニィーヴを想いながら孤独な余生を送る。

ハーンの疑義と共感

ハーンは浦島伝説に惹かれていたが、浦島が乙姫のことを考えることもなく、往生を遂げてしまうことに不満を抱いていた。ハーンにとり、浦島伝説はあくまで恋愛物語であったのだろう。したがって、乙姫の気持ちを思いやることもなく、タブーとしての玉手箱を開ける浦島に、同情する余地がないと思ったらしい。かくして梅本順子はハーンが「自己矛盾」⁴に陥っていると指摘している。ハーンは乙姫に同情する一方で、浦島に対して批判の矛先を向けているからだ。ハーンは残された乙姫の情景を思い浮かべるあまり、浦島の心中に想いいたらない、そう梅本は指摘する。

ハーンは浦島に不信感を募らせたのみならず、その浦島に共感する日本人の感性もわかりかねたようだ。郷里の両親とまみえることがなかったくらいで、絶望する人物には自立心がないに違いない。こうしてハーンは竜宮に戻る機会を逸した浦島に、同じくその浦島に同情する日本人という国民にも当惑している。そう述べるとき、ハーンは浦島が亀を助け、その返礼として竜宮での暮らしが与えられたことを忘れている。竜宮は楽園であったかもしれないが、それ以外の具体的なことは何一つ語られていない。

にもかかわらず、そのハーンも日本人の国民性に分け入り、何とか浦島に折り合いをつけることになる。日本人も季節感覚、変転する日常、あるいは祖先との関わりといった記憶を抱えている。それは日本人の心を支配している共同幻想かもしれない。そうした記憶が奪われた悲しみを理解できたのか、ハーンもどうにか浦島の心境に折り合いをつける。竜宮の乙姫よりも、この世の変転に動揺する浦島に同情することで、ハーンも自らが心の内で経験した楽園喪失を忘れさろうとしたのであろう。浦島が玉手箱を開ける行為には、衝動的でありながらも、民族との連帯という問題が内包されていることに想いいったのである。人は社会的な存在であり、孤立して生きて行けるわけではない。

その一方で、ハーンは樂園とこの世の関係について曖昧なままにしている。たとえば、西成彦は『耳の悦楽』において、ハーンが浦島伝説を「1416年の昔のこと」としていることに着目する。普通であれば「昔々のこと」という書き出しになるはずであるが、そうしなかった。詳細な年号を用いたのは、親友のバジル・ホール・チェンバレンから教えられた古文書、『雄略記』を念頭においていたものと思われる。したがって、浦島伝説は執筆時の1893年の1416年前、すなわち447年の出来事になる。この歳月の流れに鑑み、自然は悠久不変であるようだと指摘しつつも、西は浦島が味わう故郷の変貌に対する以下の場面に、環境破壊を読み取っている⁵。

今いる場所が昔に変わらぬながら、どこか昔とは違っていたからでした。……木々も野辺も人々の顔さえも、覚えのないものでした。……神社はありましたが建てかえられて場所も変わっているようでした。近くの斜面にあったはずの森は姿を消していました。村を流れる小川の音と山々の形だけが昔通りでした。

ハーンが日本の近代化に異論を抱いていたことは知られているが、しかし浦島への最終的な共鳴は樂園喪失という認識より、むしろ現実の世界の受容によるものである。郷里の異変に驚き、その変貌に絶望したとするならば、彼が竜宮にいた400年前の郷里も安住の地であったはずだ。さらに言えば、1893年の創作段階で、ハーンが日本の近代化を憂えていたとしたなら、その時代の日本も安住の地でありえただろう。

この問題はアシーン伝説が参考になる。アシーンはニーヴへの想いにかかれながらも、やはり郷里の変貌に驚いている。W. B. イェイツの1889年発表の「アシーンの放浪」(“The Wanderings of Oisín”)によると、アシーンは郷里の変貌に驚き、なおかつ老いさらばえながらも、キリスト教を広めた聖パトリックを前にして、昔日の同士が住まう地獄に落ちることにいささかのためらいもないと語っている。アシーンが求めるのはキリスト教の説く天国ではない。ニーヴへの憧れはあるが、彼女のところに戻ることが不可能であるなら、アシーンは昔日の同士のいる場所に安住の地を求めるのである。それがたとえ地獄であろうともアシーンは臆することもない。浦島と同じくイェイツのアシーンも昔日の郷里を懐かしんでいる⁶。

ハーンは東京帝国大学での文学講義『詩論』(On Poetry, 1938) 所収の「妖精の文学」において、イェイツの『葦間の風』(Wind among the Reeds, 1899) に収められている詩「空の妖精群」や劇『心願の土地』(1894)などに言及している⁷。このことからハーンがイェイツの「アシーンの放浪」についても知っていたことに間違いはない。浦島伝説への不満として、「西洋のばあいだと、だいぶこれとは違った扱いをうける」と語ったとき、ハーンの念頭にあったのはまさしくイェイツの「アシーンの放浪」であっただろう。イェイツが描いたアシーンには孤独に耐える理性がある。ハーンはイェイツを評して、「アイルランド南部の農民たちから妖精についての夥しい数の物語や伝説を収集」⁸した、代表的な詩人で

あると賛美した。

ところで、ハーンが乙姫への想いに憑かれるとき、彼は乙姫を男を蠱惑してやまない女性として想定した。竜宮への旅路においても、魯を率先して漕ぐのは乙姫であり、浦島に対して乙姫が主導権をにぎっている。アシーン伝説においても、ニーヴがアシーンを自らの馬に乗せ、やはり率先して常若の国へと連れて行く。ハーンが想い描く行動的な乙姫は、イエイツの描いたニーヴに倣ったと思われる。

イギリスのロマン派詩人のジョン・キーツは、「つれなき乙女」(“La Belle Dame sans Merci”, 1819)において、男を蠱惑しながら、かつ殺す女である「宿命の女」を描いた。乙姫もニーヴもその系譜に属するであろう。乙姫は浦島に玉手箱を持たせ、開けることなきようにとのタブーを与えている。同じくニーヴもアシーンに馬を与えながら、大地に触れることのなきようにとのタブーを課している。しかしながら、どちらの男もそのタブーを犯し、現世で与えられていたはずの歳月を奪われ、亡くなるか老衰してしまう。乙姫もニーヴも宿命の女と思われる。異界からの来訪者として、乙姫もニーヴも竜宮や常若の国から帰った男たちが経験する絶望を知っていたはずである。にもかかわらず、救出に訪れることもない。奇妙な物語である。さらに言えば、常若の国にはアシーンのような、ニーヴに相応しい男性がいなかったのかも疑問である。

ともあれ、ハーンが浦島伝説に惹かれたのは、浦島太郎という人物であるよりは、むしろ乙姫の存在であったことはすでに述べた。「ある夏の日の夢」において、彼は乙姫のことを繰り返し回想している。そしてハーンはいつしか自らを浦島になぞらえ、乙姫を母らしき人物に重ねてこう述べている。「やさしいその人はいつまでも若さを保てるように、また帰れるようにとお守りをくれたが、帰ることもせず、そのお守りも失くし、気づいてみたら驚くほど老いていた」⁹。

母親への郷愁を抱いていたハーンにとって、乙姫は外在的な宿命の女というより、むしろ内在的なアニマのような存在であったであろう。ハーンは浦島伝説を語り終えたとき、竜宮への夢はそのまま胸におさめ、現実の世界での生の意味を模索し始めたい。その後のハーンの物語における異界との交流は、現実の背後に潜む霊との交流という形態になっているように思える。浦島伝説に想いをはせてから約 10 年が経過して書かれた『怪談』は、「雪女」や「青柳ものがたり」や「十六桜」など、そうした交流の物語である。

再話というハーンの手法

ハーンは、フォークロアとして広まっている伝承に関心を抱き、それらを文学的芳香のある物語に書き換え、日本人々の意識に感銘を与えた。彼の文学は「再話」とも「翻案」とも言われている。それは原典を基に、作者が独自の想像力で、語り直したものだ。ペローやアンデルセンやグリムの作品ともよく似ている。アイルランドでも、かつてレイディ・グレゴリーや W. B. イエイツたちが民話を収集し、新たな視点からそれらを改作していたはずである。さらに、今日では先行する物語についての「書き換え」(rewriting) も盛んだ。

たとえば、「白雪姫」や「赤ずきん」という童話も、さまざまに書き換えられ、現代の読者を刺激している。というのも、それらの物語には色々と理解しがたいところがあるからだ。

「白雪姫」では王子が白雪姫の死体を欲しがる。「赤ずきん」ではおばあさんが村のはずれに住んでいる。これらは多くの子供たちが疑問に思う箇所である。

ハーンの創作もそうした疑問をすりぬけながら行ったものだ。ハーンの意識に則して日本の民話を新たな物語に仕上げたと言ってもいい。ハーンは想像力という翼を広げることのできる、優れた文学者だった。そうしたハーンの著作の一つが『怪談』である。「怪談」とは幽霊の話のことで、アイルランドでも“Ghost Stories”というタイトルのアンソロジーがたくさん出版されている¹⁰。ハーンは浦島伝説で自己の定点を確認した後、異界との交流から転じ、現世での自然との接触に文学の鉱脈を求めたものと思われる。その範例として『怪談』に収められている、ハーンのオリジナルな物語「雪女」を検討したい。

雪の化身としての雪女

「雪女」とは雪の化身である。アイルランドでも雪が降り、時にはあたり一面が雪で覆われることがある。だが日本はアイルランドよりも緯度が低いのに、毎年のように雪が降る。冬の日本は雪深いことが多い。雪女の話はそうした風土から生まれた物語だ。自然界の化身としては木や動物の場合もある。アイルランド神話にも似たような話がある。ハーンもイエイツと同じく、霊の存在に憑かれていた。たとえば、風にくるまれた妖精のことは「シー」(Sidhe)と呼ばれている。イエイツの『葦間の風』という作品は、その妖精のことを詠った詩として想起される。ハーンがこの作品に感動していたことは、イエイツに宛てたハーンの手紙にも明らかだ¹¹。

『怪談』も同じくこの世とは別の世界に住んでいる人に関わる物語である。そのため読者は背筋の寒くなるような印象を受けるが、ハーンの場合、そうした幽霊に人間的な感情を投影し、物語の筋を巧みに構成している。幽霊というのは、恐怖を引き起こす存在というよりも、人間存在の悲しみ、孤独、優しさといった情感を喚起する霊であるらしい。霊が人間の生を規定することもあるが、ことハーンの物語においては、わたしたちが失った、宇宙論的な調和を教えてくれているように思われる。

おそらく雪女は、前世においては、人間であったのかもしれない。それが「輪廻転生」¹²により雪になったものの、何かの因縁を抱え、人間の姿に変身し、この世に登場したのだろう。ハーンによると、人間は動物や植物のみならず、岩や波のようなものにも転生する。万物に魂が宿っているというという観念で、木を切るとその木の魂が悲しむといった考えと同じである。これはアニミズム的な世界観と考えてもいいであろう。虫や蛙など小さな生き物や草木の命を慈しむといったように、動物や植物にも人間と同じ靈魂を認めるということである。『怪談』にも、「柳」や「桜」など、物語の主人公として、人間と関わる存在になっている。これはハーン自身が周りの生き物を愛でていたことにも明らかだ。「雪女」にしても霊との交流の物語として捉えることもできるはずである。ハーンは日本人が近代

化の過程で失ってしまった、そうした霊との交流を自然界に聞きとったとも思える。

雪女はどこからともなく現れ、どこともわからないところへ消えて行く、とても神秘的な存在である。そうしたどこかの場所は、この世界とは異なる場所である。英語では“underground”、“spiritual world”、“another world”などと呼ばれている。仏教でも現実の世界である此岸と対比させ、彼岸などという言葉が使われている。あるいは別世界と言ってもいい。アイルランドでもハロウィーンの時、日常の空間に妖精が現れると信じられている。異界の境目としては川辺や海辺が多いようだ。その異界から出現するのが幽霊である。

雪女もそうした異界からやってきた女性であるだろうが、しかし彼女の住む異界はこの世とどこかでつながっている。乙姫の竜宮やアシーンの常若の国とは違う世界である。雪女の異界は心理学の言葉で言えば、わたしたちの無意識に埋め込まれた世界のようにもあり、わたしたち生者の実存の意味を問う存在なのかもしれない。ハーンは自らの位置を浦島に読み取った後、現実のこの世を定点として、異界との交流の瞬間を探ることにしたのである。

実のところ、雪は純白で輝くような美しい景色を見せてくれるが、あれ狂うような吹雪のときには人命を奪うほどの猛威を振るう。そのため雪には二面性があると言っても間違いない。生成と破壊、あるいは肯定的な側面と否定的な側面という、両極を持ち合わせている。雪女もまさしくそうした二面を持っている女性である。雪女は若い巳之吉を救い、結婚し、子どもまでもうけるが、その一方で老人の茂吉を殺している。

「雪女」の冒頭と結末の場面を想起したい。前者は巳之吉が初めて雪女に出会ったところである。雪女はすさまじい形相をして、老人の茂吉を殺し、若い巳之吉に向かって、このことを口外するとおまえも殺すと威嚇する。後者は巳之吉が雪女の戒めを忘れ、雪女の話をする最後の場面で、雪女はやはりすさまじい形相をして巳之吉に挑み、ついに姿を消す。しかしながら、この二つの場面の間の期間にあたる巳之吉との家庭生活において、雪女は心優しい妻であり母でもあるし、温かな家庭生活を育んでくれる女性であった。このことは大切なところだ。

雪女は男性の心を惹く美しい女性であると同時に、その男性の命を奪う恐ろしい女性でもあった。その意味で、雪女は「宿命の女」と言っても間違いない。この宿命の女は西洋的であり、ハーンの西洋的な感性が巧みに投影されている。その問題を検討しておきたい。

西洋と東洋

一般的に、日本人の考えかたからすると、自然は中性であるが、西洋では自然は女性として表象されると言われる¹³。これはハーンの見解でもある。そのため「宿命の女」として登場する雪女は、きわめて西洋的な感じがする。日本には自然を擬人化することはあまりない。むしろ自然は中性として受け止められている。そのかぎりでは「雪女」はハーン独自の物語であり、浦島伝説の乙姫と同じく雪女にも、そのアニマのようなものが仮託され

ているのかもしれない。

浦島伝説について述べた際、乙姫に対して抱くハーンのイメージが、「宿命の女」であると同時に、アニマ的なものであることはすでに指摘した。以降の著作において、ハーンは外在的な世界へと想像力を広げるのではなく、現実の世界に寄り添い、内在的なアニマ的存在へと関心を向けたらしい。言い換えるなら、ハーンは現実の世界の側から、霊的な存在との交流に自らの方位を探ろうとした、そう言えるだろう。

したがって、ハーンの描く雪女は、「宿命の女」という紋切型の人物では収まりきれないところがある。それは雪女が消えていく最後の場面を読めば明らかだ。雪女はおそらく巳之吉との平穏な生活に満足していたのだろうが、彼がかつての約束を守るという条件に付きまといわれていたと思われる。そして巳之吉がそのタブーを破ってしまったために、消えざるをえなくなる。雪女は別世界の人なので、現世との間にタブーが必要だったのだろうが、雪女が苛まれるその悲哀は、浦島やアシーンたちの悲しみと比べ、女性の心情を描いて見事である。

別れのときの雪女には言い知れぬ悲しみがつきまといっている。彼女にとって、最後の別れは無念だったのだろう。彼女は恨めしように巳之吉につめより、子どもたちの世話をするようにと命令を下し、姿を消す。この雪女という女性の背景には、ハーンの実母がまだ認められるかもしれない¹⁴。雪女が幸福な家庭を捨て、異界に戻る場面は薄幸の女性そのもので、男の裏切りに直面し、悲しみで方向を失った女性とも思える。そうであるなら、ハーンに関心は、巳之吉や雪女の子どものことよりも、雪女の心にあったのであろう。雪女が巳之吉の家から離れる場面には、生きる場所を失った彼女の無念さが如実に現れているように思える。

そのように読むと茂吉と巳之吉の関係が曖昧であることに気づく。父と子というテーマが不在化されているのだ。むしろ「母」というところに重きが置かれているようである。雪女が巳之吉を助けるところで、「たとえお母さん」にも口外してはいけないと言っているが、巳之吉には母しかいないような言い方である。そして巳之吉にも父としての役割が与えられていない。十人の子どもが生まれたとしか描かれていないし、その存在感が希薄である。その一方、巳之吉の母の幸福な最期は丁寧に語られている。雪女が消える直前、巳之吉が雪女に見下ろされ、また自らが雪女を見上げるところからすると、雪女と巳之吉の関係は母と子のようにも思われる。

ハーンはボードレールの「月の贈り物」¹⁵という作品に感動していた。これは母である月が子どもを見つめる様子を描いたものだ。月は「宿命の女」のような存在になっている。ハーンの雪女は19世紀末に流布した、西欧のそうした「宿命の女」を手本にしていたのである。ハーン自らの無意識が入り込むことも承知してのことだったであろう。そして雪女のような存在に憑かれていたのである。雪女と巳之吉との出会いは、至福の瞬間であることの意なのかもしれない。

ハーンの「雪女」はその後、日本の各地で書き換えられた。茂吉と巳之吉の関係を父と

息子とし、雪女と巳之吉の間の子どもの人数も制限された。こうした改作は日本人には自然なものとみられながら、ハーンの創作を貶めることにもなる。日本の社会が父権制であったため当然であるが、浅い物語のように書き換えられている。その一方で、ハーン独自の「雪女」に感動する日本人は数多い。ハーンの世界には日本人の心の琴線に触れるところが多かったからだ。雪の化身としての美しい雪女、その女性との 10 年の幸福な暮らし、そして異界への旅立ちという現実を前にした雪女の悲しみなど、読者は心を打たれる。

ハーンの日本文化への貢献

ハーンの世界は日本人が忘れてしまった世界を描いている。日本は西洋文明を取り込み、自らの衣装を脱ぎ捨てつつあった。そうした近代化の過程で日本人は自然を愛でる眼差しを失っていたのかもしれない。折しも 1892 年のこと、アイルランドでは、ダグラス・ハイドが「アイルランドにおける脱英国化の必要性」を発表し、アイルランド独自のアイデンティティの構築を説いたが、その文章の中に、西洋文明を取り込むことで自らのアイデンティティを失っている日本を悪しき例として挙げていた¹⁶。

当時の日本は「脱亜入欧」という考えを支持していた。アジアという服を脱ぎ棄て、ヨーロッパの服をまとうとした。そして近代化の流れに乗る。西欧のものはすべてよしとする方策であった。そのため学校教育においても外国の人々の採用を優先した。ハーンのような学識のある教師は願ってもない存在であったであろう。それと同時に、日本は自らの服を脱ぐことで、心も失っていった。そして百年が経過して、改めて自らの文化を顧みているのが、日本の現状である。いわゆる「日本学」(Japanology)という学問の誕生にも見てとれるだろう。

ひるがえって、日本にとって、ハーンの功績は大きい。工業化にともない自然の破壊が日常化している 21 世紀のわたしたちにとって、自然に根ざした日本の土着の文化に対する、郷愁のようなものを描いて見せてくれている。もちろん、西欧の文明を受け入れなければ、現在のような日本の発展はなかったはずである。グローバル化が進んでいる今日、ますますそのことを意識させられる。

その一方で、アイルランドに魅了される日本人は数多くいる。それはアイルランドが魅力的だからである。自然の美しさもあるが、人々の温かさに感銘を受けるからだ。もちろんアイルランドにも問題はある。かつてジェイムズ・ジョイスという作家の 10 ポンド紙幣があった。表はアイルランド人の母語のゲール語、裏は多言語で書かれた『フィネガンズ・ウェイク』からの引用であった。アイルランドという国家を形成しながら、同時に EU の一員であることを示唆していると思われる。

そうしたアイルランド文化に即して、日本の魅力を紡ぎ出すことに貢献したのがハーンだった。アイルランドは日本の北にある北海道ほどの島だが、それでもたくさんの文学者を輩出している。ハーンもアイルランド人としてそうした想像力に恵まれていた。それに加え、ハーンは外国人として日本の中に溶け込むことができた数少ない一人である。こう

して彼は日本という東洋の国を海外に紹介することになった。その功績にははかりしれないものがある。ハーンの功績とは日本が忘れていた価値観を発掘し、西欧に紹介しただけでなく、日本人への啓蒙になったことである。

ハーンは古き時代の日本の姿、わたしたち日本人の基礎をなす思想風土へと読者を誘い、失われた価値観を想起させ、哀惜の念を引き起こし、その価値観を回復しようと奮起させてくれた。言い換えるなら、日本という国家が拠って立つ、アイデンティティに目を向けさせてくれる存在であった。あるいはハーン自身が、当時の日本のアイデンティティに、危機感を抱いていたのかもしれない。

したがって、「雪女」には近代文明への告発が込められていることに間違いない。こうした背景にハーンの個人的な思想が投影されているとしたら、それは自然や世界が人間と一体であるとするやはりアニミズム的な考えによるものと思われる。ハーンが日本人に感動を与えるとしたら、日本人が忘れていた自らの心の琴線にふれるからなのであろう。同時に、ハーンはその感動を世界の人々にも伝えてくれたのである。

異界との交流

ところで、ハーンの世界には別世界との交流が多い。これまでに論じてきた「雪女」も同じである。どこからともなく現れ、どこかわからないところへとまた消えてしまう。そのどこかは異界であることに間違いないが、その世界と現世との間を往還できるのは女性でしかないように思える。男が異界へと連れられるのは、その女性を媒介としている。おそらく乙姫もニーヴも異界からの来訪者として、この世を再度訪れることも可能ではなかったのか、そう問うてみてもいい。

しかしそのような事態は訪れない。ハーンは『怪談』において異界との交流の物語を書くが、その世界は現世の彼方の漠としたところである。ハーンは異界との交流より、むしろ現世における自然との交流に求めているのだ。そしてアニミズム的な観点から、森羅万象の背後に霊の存在を想定することになった。ハーンが惹かれた浦島伝説やアシーン伝説における異界との交流は、つかの間の出来事だったのであろう。その変貌の背景にあるのが浦島伝説であった。ハーンは自らを浦島と想定したとき、現世という視点で異界との交流を願ったものと思われる。異界は遠く離れた楽園ととどめ、その交流は手で触れ、肌で感知できる自然界への洞察に期待したのであろう。

再び「雪女」を挙げたい。雪女は夫や子供のもとから、どこかへ消えていく。が、彼女は家族の様子を見守ると言って去っている。ということは、彼女は家族の身近、おそらく雪の世界にいるということになる。雪女は愛でることは自然を愛でるものの謂いである。こうした自然観の背景にケルトのドルイドの教えを読み取ることもできるかもしれない¹⁷。

注

¹ 手紙については、滋賀大学の真鍋晶子教授にご教示を受けた。御礼申し上げます。原文は“I had a Connaught nurse who told me fairy tales and ghost stories”で、1901年9月24日の日付が入っている。なお、小泉八雲記念館「ラフカディオ・ハーンとアイルランドー記憶のはじまりー」<<http://www.matsue-tourism.or.jp/yakumo/ireland/index.html>> にも、この箇所の引用がある。

² ラフカディオ・ハーン、『東の国から』上、平井呈一訳（岩波書店、1995年）29。

³ Miranda J Green, *Dictionary of Celtic Myth and Legend* (London: Thomas, 1992) 166.

⁴ 梅本順子の指摘は以下のとおり。「せっかく釣った亀を竜宮の使いだからということで放してやるという善行を浦島につませたばかりに、純粋な恋愛譚で処断できない自己矛盾をかかえることになったことに、ハーン自身が気付いていないことだ」。梅本順子、『浦島コンプレックス』（南雲堂、2000年）144。

⁵ 西成彦、『耳の悦楽ーラフカディオ・ハーンと女たちー』（紀伊国屋書店、2004年）71。西成彦はハーンの文章を引用した後、「自然破壊と風景の変化をとまなう四百年として、きわめて具体的に理解したことがここからわかる」と説明している。

⁶ Yeats の“The Wanderings of Oisín” は、人々をキリスト教徒に改宗させた聖パトリックとの会話という体裁である。

⁷ Lafcadio Hearn, *On Poetry* (Tokyo: Hokuseido, 1941) 253-56, 265-67.

⁸ Hearn, *On Poetry* 253.

⁹ ハーン、『東の国から』32。

¹⁰ たとえば、Gray, Rosemary, ed., *Irish Ghost Stories*. London: Wordsworth, 2011. を参照。

¹¹ George Hughes, “W. B. Yeats and Lafcadio Hearn: Negotiating with Ghosts,” *Irish Writing on Lafcadio Hearn and Japan*. ed. Sean G. Rona (Kent: Global Oriental, 1997) 188-203. 参照。なお、ハーンはイエイツに、『葦間の風』の“The Host of the Air”をめぐる改稿への抗議文を送り、イエイツからその返答を受け取っている。W. B. Yeats, *The Collected Letters of W. B. Yeats*, ed., John Kelly and Ronald Schuchard, vol. 3 (Oxford: Clarendon, 1994) 101-02.

¹² 「輪廻転生」は神智学で使われる用語でもある。

¹³ 池田雅之、『小泉八雲ー日本の面影ー』（NHK、2015年）91。

¹⁴ 池田 92。ハーンの物語は自伝的であるとの指摘もある。

¹⁵ 牧野陽子、「ラフカディオ・ハーン『雪女』について」、『成城大学経済研究』105号（1989年）：89-125。牧野陽子は、「『雪女』は言ってみれば、ハーンのなかで、日本の伝説と西洋文学の女性像が相互作用をへて熟成し、ボードレールの言葉を用いれば、両者の照応・コレスポンデンスの結果、生み出された作品であろう」、と指摘している。

¹⁶ Douglas Hyde, “The Necessity for De-Anglicizing Ireland,” *Irish Writing in the*

Twentieth Century: A Reader. ed., David Pierce (Cork: Cork UP, 2000) 2-13. Douglas Hyde はこう述べている。"We will become, what, I fear, we are largely at present, a nation of imitators, the Japanese of Western Europe, lost to the power of native initiative and above all to second-hand assimilation."

¹⁷ 井村君江は「ドルイド教は、本来啓示による宗教ではなく、自然宗教であり、宗教と哲学が渾然一体となっているものである。従って太陽と大地の古い神々を信じ、生き物の中に霊的なものを近くし、自然と、宇宙と、自己の理解と一体化を試みている。また命は生と死、更新と再生の周期を繰り返すことも信じている」と述べている。井村君江、「ケルト神話の宇宙観—ドルイド僧を中心として—」、鎌田東二・鶴岡真弓編『ケルトと日本』（角川書店、2000年）58-59。

Lafcadio Hearn and Celtic Myths: Communion with the Other World

YUKI Shiro

abstract

Lafcadio Hearn's mother tongue was English, although he also spoke some French and of course Japanese. He wrote in English and was undoubtedly influenced by Irish folklore, legends and culture. Hearn in a letter to W. B. Yeats once wrote, "I had a Connaught nurse who told me fairy tales and ghost stories." So, with his deep interest in and knowledge of Irish Legends, and in particular the story of Oisín and *Tír na nÓg*, Hearn was well positioned to make comparisons between Japanese and Irish legends and thereby to complain of Urashima Taro's easy death, when he wrote "The Dream of a Summer Day" included in his *Out of the East*.

Hearn seems to have in mind the legend of Oisín when he says, "Things are quite differently managed in the West." In the legend of Oisín the hero does not voluntarily break his promise with Niamh. Furthermore, following his downfall, Oisín, although an ancient man, remained alive and led a solitary life in this world to the last. Hearn was equally fascinated by the legend of Urashima Taro, but he might have been simultaneously forced to compare the relatively swift and easy death, without long suffering, of Urashima Taro, as against that of Oisín. It is difficult to find plausible conclusions for Hearn's emotional wavering.

In order to examine the question I first of all took up the legend of Urashima Taro along

with the legend of Oisín. Secondly, I elucidated Hearn's Western views on the legend of Urashima Taro. Thirdly, I broadened my points to examine the communion with the other world in comparison with the story "Yuki-Onna" included in *Kwaidan*. Lastly, I compared the difference between the West and the East to be explored in the story and discussed Hearn's impact on Japanese culture. Hearn had a keen interest in the folklore of Japan and rewrote it as stories with literary fragrance. His method is called retelling or adaptation. Hearn was a superior writer who could spread his wing of imagination.

In those days, the Japanese supported the idea to "Quit Asia and Join Europe." Indeed, Hearn rewrote many stories about Japanese culture which we ourselves had forgotten. Japan enthusiastically imported Western culture and disrobed its own clothes. In doing so, the Japanese also lost sight of their love of nature. When we reflect on such historical flow, we Japanese feel that Hearn's foresight on Japanese culture was precocious. However, we ourselves are now reflecting nostalgically on traditional Japanese culture. Of course, if we didn't accept European cultures, we could not have developed as we did, but we are particularly conscious of our own lost culture in the current global world.

Anyway, Hearn contributed to spinning beautiful stories out of crude Japanese folklore. But, in addition, Hearn could assimilate into Japanese culture and introduce them to the Western world. We cannot praise his exploits too much. What he has done for Japan is that he uncovered traditional values buried in the unconscious of the Japanese people and introduced those values abroad while at the same time enlightening the Japanese.

Hearn's stories remind us of what Japanese are and how we are constructed, because he rewrote our own traditional values. Hearn might have been worried more than anyone else at the time with the loss of Japanese culture. Hearn's stories move us because they touch our heartstrings. This is true of "Yuki-Onna." It speaks to us of a cosmic human harmony with nature.